

コヒオドシを初めてみたのは日本産ではなくて、ヨーロッパ産原種の標本。中学1年のとき長兄の通う大学に日比さんというチョウを趣味とする学生さんがいて、兄がチョウ好きの私を紹介してくれ、学生寮の日比さんの部屋で見せてもらった彼の標本箱に、日本以外のチョウがたくさん並んでいるのに驚く。日比さんはクジャクチョウが滋賀県伊吹山と香川県伊吹山双方で記録されているが、あれはいずれも自分の記録だと語ってくれた。ヨーロッパには日本にもいるチョウがいくらかいるとは知っていたが、日本産よりもオレンジ部分が広くて明るい感じのコヒオドシと、翅表全体がきらきらと金属光沢に輝くベニシジミが特に印象に残った。右図は社会人となってフランスのチョウ愛好家と郵便による交換を始めたときに送ってもらったフランス産コヒオドシ。私自身の初採集は1968年の



June 8, 1961 Pont de Dere, France
コヒオドシ leg. B.Frederic



Aug. 12, 1968 上高地明神池河原
コヒオドシ

上高地で、その後1976年7月末に北海道阿寒湖湖畔にあった前田邸の黄色いタンポポが咲く庭園で、無数に飛び遊ぶコヒオドシの大乱舞を体験している。北海道では瀬戸瀬温泉や愛山溪の大雪登山口でも多数のコヒオドシを目にしたが、前田邸でみた光景は、おそらくネット一振りでも20数頭は一度に入ってしまったであろうほどの大饗宴で、その後もあのような大乱舞を目にしたことはない。

日本では本州産：*Aglais urticae esakii*、北海道産：*A. u. connexa*と亜種区別されているが、*connexa*はヨーロッパ産原種にくらべて前翅の黒紋が繋がっていることを示したもの。本州産は北海道産よりも黒色部が発達している。本州では疑いなく高山チョウで、美ヶ原から三城牧場への下り百曲がりでもコヒオドシに出合ったときには、美ヶ原が高標高地であるという認識がなくてあれれと思ったものだ。北海道では平地でも普通にみられ、カメラで迫るにも花の蜜を吸う情景に容易にであうことができるチョウだ。



Aug. 5, 1986 長野乗鞍岳



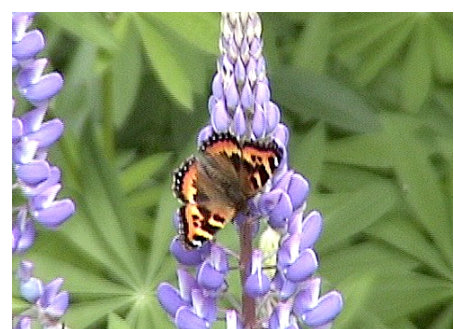
July 21, 1997 北海道瀬戸瀬温泉



June 25, 1996 愛山溪



July 21, 1997 瀬戸瀬温泉



July 7, 1999 オンネトー

July 12, 2017 : 富良野の布礼別川林道

1999年7月8日に訪れたときは林道の複数個所でオオイチモンジ♂との出会いがあり、林道奥半ばでは路面で吸水中のオオイチモンジの新鮮♀個体が出て、この珍しい光景をビデオ撮影しなければと近づいたとたん飛び立たれ、そのまま姿を消されるという悔しい思いをした。翌2000年7月15日の訪問ではオオイチモンジにはまったく出会えなかったが、林道路傍沿いにはおびただしい数のコムラサキとヒオドシチョウが吸水していて、エゾスジグロシロチョウの大集団吸水群のそばを車で走ると、まさにチョウ吹雪が舞う光景が展開し、しばらく待って集団が再形成されてからそのすごい情景のビデオ撮影記録をとったりした。今年の訪問はやや遅く、オオイチモンジには会えないかもしれないがコムラサキやヒオドシチョウには会えるだろうと期待をもって朝6時半、まだ起きていないスタッフには挨拶できないままフロントにキーを置いて宿を出る。到着した林道入口の手前100mほどの路傍右に「全面通行禁止」という大きな看板があって度肝を抜かれる。でこぼこの穴だらけの未舗装道路を進むと、いきなり大きな重機が動く護岸工事が進行中の現場となり、部分的に鉄板が敷かれた道をゆっくりと進入していつてみる。工事関係の男性が当方の車に気づいているのは確かだが車での進入を静止するそぶりはなく、100mほどの工事現場を通り抜けると通いなれた林道が奥へと続いている。この時点ではまだ全面通行禁止の意味は分からない。木陰となった部分が格好の湿地帯となっていて複数頭のキバナセセリがあちこちで吸水している。最初の撮影対象は路面で夢中になって吸水中のコムラサキ。オオイチモンジの姿はなく、さらに湿り気のある部分がないかと走ると、1kmも進まないところで倒れこんだ大きな柳の樹が道をふさいで完全に通行不可。その先は林道自体が奥に向かって延々とえぐられるように破壊され、大きな岩石がごろごろと転がって普通には歩けない。台風の影響で布礼別川が氾濫し土石流が襲った爪痕だ。この状況を目にして初めて全面通行禁止とした理由に納得。湿地帯へともどれば、愛山溪で花蜜を求めて飛来した個体の撮影ができなかったコヒオドシが吸水中で、ようやく撮影記録がとれる。

